

「途方に暮れる」瞬間を生きる場所に転化する人

小坂頭太郎第一詩集『五月闇』に寄せて

鈴木比佐雄

1

小坂頭太郎さんの詩には、強烈な光と影のドラマがある。おびただしい光に満ちた現実が反転されて、幾重もの影たちが言葉となつて紙面に黒く塗りこまれている。言葉は光と影のうごめく波動のように使用されている。光を受けた存在者が影を作るが、光と影だけで存在者が存在していた痕跡を記していき、今まで読んだことのない独特な詩法が展開されている。言葉に光量が多すぎると感じているのかも知れない。言葉から光を絞り、影を主体にして詩を組み立てようとしているのだろう。しかし小坂さんの姿を見つげようとするが、その姿は光と影の狭間に隠れてしまっている。小坂さんの必死な息遣いが聴こえてくるが、どこにも小坂さんの「ワタシ」の姿は見えないのだ。確かに光と影で詩を紙面に描き続けて、その詩篇がところどころに鈍い光を発しながら置かれてあるのだ。いつしかその場所は小坂さんの「ワタシ」の

場所ではなく、私たちの無意識の広大な場所に転移しているのかも知れない。

そんな不可思議な詩篇が送られてきたのは、二〇〇八年五月の光り輝く若葉の美しいところで、茂った葉群れの木下闇も濃くなり始めていた。送られる前に小坂頭太郎さんからメールがあった。コールサックのホームページを見て、そのポリシーや詩運動に信頼感や共感を覚えたといい、詩篇を読んでほしいとのことだった。コンピュータモニターの光点からなるインターネット・ホームページのあまたの出版社の中から小坂さんが選んだのは、「コールサック」という詩の石炭袋を作っている出版社だった。そのころ私は敬愛する浜田知章さんが亡くなった頃で、最後の詩集の製作・発送と「浜田知章さんを偲ぶ会」の準備や『生活語詩二七六人集』の編集に追われていたが、その文面に惹かれて、なぜか肉声を聴いてみたくなった。電話をかけると漏れてきた声は、確かに三十代半ばのまだ青年の声だが、落ち着きを感じられた。それは若くしてこの世の虚しさで生じる絶望を見てもしまった人のような冷静さを感じた。小坂さんの経歴など何ひとつ知らない私だが、小坂さんの声からその背負っているものの重く苦渋に満ちた時間を経ていると直

観した。それゆえか小坂さんが私と同じような詩の志を持った人として親しみを感じた。優れた詩には詩人の生きてきた時間が宿っている。小坂さんの詩行にも、その時間が凝縮されているのだ。

詩集題の「五月闇」を読んでみたい。木下闇きのしたやみという言葉は、拾遺和歌集にもあり現在でも知られているが、五月闇さつきやみはさほど知られていない言葉だ。五月雨の降る頃の夜は暗くて、深い暗闇であることを示した言葉で後拾遺和歌集や平家物語にも出てくる言葉だそう。小坂さんの新詩集『五月闇』の中心テーマは、闇の中にもっと深い闇があり、その奥の闇に自己でありながら他者にも通ずる膨大な無意識を背負った人間存在がいることを見詰めようとする試みだ。

五月闇

五月闇さつきやみはあまりに暗くて

まばらにともる貧しげな街灯ばかりが頼りだ

ここいらでひと休みしようと立ち止まるのだが

今しがたすぐ側を治うて歩いた城壁までが見当た

らない

五月闇はあまりに暗いのだ

頭のすぐ後ろに膨大な闇が連なって

ふとすると気が遠くなる

ふいに 匂い立つ悪意は

愚かで聞き分けのない 孟夏の精霊ドモのようよ

うやうや来て来たかと

寸時浮き足立ったが

すぐそれは 不遜なアナタの残り香だと知って

慄いてしまう

（「五月闇」前半部）

年度がわりの四月の後に、環境に適應できない若者の鬱的な心境を五月病と指すことがある。自分が望んで夢を持って進んだ新しい場所が、自分が考えていたものではなく、期待を裏切り、耐え難いものに感じられる。家族や教師や多くの人の支援でこの場所にいるのだが、その場所にいる違和感が自分を苦しめていく。その蟻地獄のような心境を五月病と一般的に言われる。小坂さんも「五月闇」という詩を書かざるを得なかったのは、この自分の選択によって立っているこの場所への違和感が

ら、他の場所へ移動しようとするが、ますますその場所は暗さをまして、果たしてこの「貧しげな街灯」を頼りに進んでいき、自分の望んでいる場所へ辿り着けるのか、途方に暮れている心象風景を描いている。私はこの詩一篇の出だしを読んだだけでも、小坂さんが現代の若者の置かれてある内面を正面から書こうとしている、志のある詩人であると感じたのだ。「五月闇はあまりに暗いのだ／頭のすぐ後ろに膨大な闇が連なって／ふとすると気が遠くなる」という闇のただ中にいる、頼りなげな心境が逆に生きることへの誠実さを物語っている。小坂さんが求めている場所が理想の場所であればあるほど、闇はもっと深く濃くなっていくのだろう。また、「匂い立つ悪意」も現われきて、小坂さんの行く手を阻むだろう。それは自己を破滅に陥れるかもしれない身近な「不遜なアナタの残り香」でもあるのだ。その場所に立ち竦みながら小坂さんは、自分の本来的なものを求めて立ち去ろうと試みているのだろう。

音のない赤色灯が 時折とおくの水たまりを掠め
ていく

こんな夜更けに走り込みを行うジャージの若者の

一団が

横顔を行き過ぎる

足元には白い髪の毛 白い睫毛まつげの子供が二、三 へば

りつき

堀に面して釣りをする者

乳母車を押す子守唄の

年増女の生活やつれた顔は

そのまま乗せられた赤子の寝顔のようで

舌打ちしてシャカリキに誰かを呼ぶ声は

他でもない私自身の呼び声だろう

しかしそれらはすべて闇の中の気配にしか過ぎない

通りすがりのつもりであったワタシは

シンピカ有頂天の自転車みたく無知であったワタシは

いつしか季節の狭間そのもののような

不鮮明なところへ迷い込んでしまったのだ

〔五月闇〕の中間部

小坂さんの〈ワタシ〉とは、暗闇の中で見えない他者の気配を感じるが、その気配から他者の生きる苦悩を感じ受してしまうのだ。そしてその他者の生きる切実な声が、

じつは私の無意識から湧き起こる〈私自身の呼び声〉であつたことを自覚するのだ。他者の〈誰かを呼ぶ声〉を〈私自身の呼ぶ声〉と等価であるとする小坂さんの他者への感受性がこの心象風景を生み出してしまったのだろう。小坂さんは無意識下の「不鮮明なところに迷い込んで」いく〈ワタシ〉を自らに住まわせてしまったのだ。

立ちすくむ五月雨はつめたくもあたたかくもなく
鼻すじを伝つて正確に 同じ靴先へと落ちていく
暗がりの中でそればかりが よく見えた

無数の蛇が絡み合つて 息苦しく
青白い炎に 灼かれている

ワタシにはもうどうすることもできない

五月闇はあまりに暗くて 途方に暮れる

(「五月闇」後半部)

小坂さんの〈ワタシ〉はいつしか他者であり自己ある存在者たちが絡み合う「息苦しい」場所を見てしまったのだ。「無数の蛇が絡み合つて 息苦しく／青白い炎に 灼かれている」光景は、人びとが生きるための欲望で格闘し合い、互いの命を殺ぎながら、実は青白い炎でみんな灼かれていくのを内観しているのだ。影から闇へ向かう内面の問いに簡単な答えなどは存在しないだろう。「ワタシにはもうどうすることもできない」という無力さから出発するしかない。そんな単独者としての根源的な問いを秘めた、詩的な精神を抱え込んでしまった宿命をこの詩では暗示しているのではなからうか。「五月闇はあまりに暗くて 途方に暮れる」という詩行こそ、新詩集の最も重要な一行だろうと私は感ずる。私たちは生きることに慣れると、「途方に暮れる」ことをしなくなる。すぐに答えを知りたがり、失敗を恐れ、情熱をかけて挑んでいくことから避けていく。本来的なものへ根源的なものへ問われていく「五月闇」とは、それらと隣接しているように思われる。小坂さんの〈ワタシ〉はその場所へ向かい、「途方に暮れる」ことが新しい世界を作り出す前提であると告げているのだ。

詩集『五月闇』は、世界を陰影を帯びて豊かに感じるための報告書であるかのようだ。I章「五月闇」十二篇とII章「晴れやかな日」十三篇の計二十五篇から成っている。一章の「明暗」の冒頭では「花曇り／＼手馴れた仕事をあとにして／＼ぼつぼつと 我にもどりつつある曖昧な居場所」という三行が示すとおり、小坂さんの影を呼び戻す詩法はまず、「花曇り」という世界を通して、我を想起していく。その「ぼつぼつ」と想起していく時間のゆったりとした流れの記述が詩の展開となっている。最終連は「いまだ僕がそこに居ないよう 祈って／＼はらはらとする／＼はらはらとしている」で終わっている。小坂さんにとって詩とは、心の平安や安住の場所を求めるのではなく、「僕」の居場所から打ちこわして、途方に暮れるように「はらはらとする」ことなのだ。小坂さんの闇には、花びらが埋まっていたり、あらゆる色彩が他者の存在する音とともに垣間見えてくるのだ。暗さの奥のさらなる暗さとは、じつは暗闇の中で無数の色彩や他者の発する肉声や存在音などを想起することが出来るかという問いなのだろう。例えば詩「遠雷」の「群青」、

詩「あたたかな 狼煙」の「立ち昇る」もの、
詩「残酷な眼」の「赤く腫み 青く爛れて」いる
月、詩「喪 中」の「思い出そうとしても思い出
せないこと」をさらに思い出そうとすることなどのよう
に、小坂さんは自己の奥深くに眠っていた光景を取り出
してくる。一見外界の描写であるかのような詩も、小坂
さんの塗り込まれた心象風景なのだ。

第二章「晴れやかな日」は詩「講堂」から始まる。

講堂

講堂の窓ばかり明るい

明るいの窓に空が映り込んでいるからだ

せいはいしよく
青灰色にちぎれた雲のこぼれて
受けるものは何も無い

もうはや講義が

どこであるのか判らなくなる

この詩「講堂」は学生時代を想起して書かれたものだろうが、たぶん小坂さんの詩作の原点になったものではないか。光が存在することに驚き、その明るさゆえに学校の存在理由や自分の受ける講義の意味などが、すべて無意味に感じられてしまい、途方に暮れている場面だ。しかし、この光の瞬間が小坂さんに啓示のように詩的精神をはるか遠くからもたらしたのだ。光の言葉を受けた青年が後に詩を書き始めた記念すべき作品であり、なぜ詩を書くかという問いにもなっている。また在ることへの驚きも十二分に宿されていて、存在論的な視線も濃厚に感ずる。この詩を原点にする小坂さんは、日常を異化せざるを得なく、自然と本来的な問いを発することの出来る詩人である。その意味では、重たい問いを抱えて詩作を生涯にわたって持続する詩人になるのではないかと私には感じられた。

小坂さんは、最近「コールサック」や「衣」に参加するまで、どの同人・会員誌にも属さずに一人で詩作を続けて、自己の詩作を追求することを純粹に守ってきた。その意味ではこの詩集はほとんど現役の詩人の誰からも影響を受けていないはずだが、私には現役の優れた詩人

たちに匹敵する詩的精神とそこから発せられる確かな詩行の展開が実現されていると感ずるのだ。

新詩集の最後の詩「晴れやかな日」は、例外的に家族のことを書いた詩だ。詩作を続ける小坂さんが、家族とともに生きる意味を確認し、孤独さを隠れ蓑にしないで、家族から投げかけられる問いに誠実に応えていこうとする詩篇だ。最後にこの詩篇を引用してこの小論を終えた。いつの時代でも宮沢賢治のように詩作する若者が現われてくる。小坂さんもその一人だが、本格的な若き詩人を読みたいと思っている方々に勧めたい。また同時代の若き詩人たちにもこの試みの深さを読み取ってほしいと願っている。

晴れやかな日

押し通る

僕らは

そのままのかたちで

世界が来いと

耳打ちするから
はとして僕らはふたたび
透き通る

ごらん
雪が疾走^{はし}る

ささくれだつたたましいが
あんなに空に訴えて
生まれては

またすぐ消えて
尽きることない
あんなにきれいな

僕らの
ぎんいろの孤独

まだ 行こうじゃないか
声が聞こえる

グラウンドを
子供たちが駆けて

素ツこけても また駆けて

ようやとと

ちいさな胸が

しろい

どこまでもながいテープをつきぬけて

僕らのかなしみが

押し通る

天高く

晴れやかな日

いまま途方に暮れた闇を抱えながら、小坂さんは一人の悲しみに佇むのではなく、「僕らの／ぎんいろの孤独」や「僕らのかなしみ」を生きる場所へと転化させようと歩みだしている。小坂さんの「晴れやかな」光と「五月闇」をたたえた影を孕ませた言葉が深く根を張り、幹を太らせ花開き多くの人びとに届くことを願っている。

小坂顕太郎詩集『五月闇』栞解説文

鈴木比佐雄

コールサック社
2008